

これまで、彼女のような少女に惹かれたことなどなかった。

香穂子の華奢なほっそりとした体は、未成熟な青さを容易に想像させる。

吉羅の食指が動くようなタイプではなかった。

少なくとも、今までは。

しかし今日の彼女の装いはベアトップのドレスで、彼女の胸が意外なボリュームを備えていることが見てとれるデザインだった。

セットのショールで胸元を覆っていた時には隠されていた乳房の膨らみが、誇らしげに吉羅の瞳に映った。

制服の上からではわからなかった彼女の肉体が、思いの外成熟しているのを知らされた。

胸も、そして腰のまろやかな張りも、細いけれど出ているところはしっかりと女を主張している。

淫靡な想像が、吉羅のそこを持ち上げさせていた。

何を、馬鹿な……

吉羅はシャワーの熱い湯に髪を浸しながら、想像の中の裸身を振り払った。

今日の彼女の露出過剰とも思える装いに、不覚にも心が動いた。

活動的な制服に身を包み、しょっちゅう走り回っているおっちょこちょいな小娘。

日頃の彼女のそんな印象を一変させる。

「女」としての彼女を強く意識する。

ドレスの下に隠された曲線を思い浮かべると、不本意だが下腹部が持ち上がっていくのを感じて溜息をついた。

肉体的に成熟していても、彼女はきっと未経験か、もしも仮に男性経験があったにしても、ごく浅い程度だろう。

その思いは吉羅の中に確固として根付いていた。

自分が近寄る都度怯えたり、不意に手や腕の接触を持った時の彼女の反応で処女と確信していた。

——処女の娘を抱き、自分好みの女に仕込むことも悪くはない。

むしろ、興味があると言える。

それは彼がまだ踏み入れていないジャンルだった。

邪な欲望が、悪魔の囁きが湧いて出た。

ベッドのそばで、断続的に響く水の音が聞こえていた。

それで香穂子は目を覚ましたのだった。

ここからはシャワールームが近いのがわかり、瀟洒な部屋の中をぐるりと見回すと吉羅の姿が無い。

つまり、今彼はシャワーを浴びているのだ。

自分のすぐそばで。

彼が、全裸になってシャワーを……

想像するだけで、香穂子は混乱してしまった。

酔い醒ましに来ただけ、何もしない、そう彼は言っていたような気がする。

胸の開いたセクシーなドレスの彼女を見ても、余裕のある笑いで似合っていると言われた。

演奏時にはショールで胸元をカバーしていたが、吉羅との会食の時に乳房を強調するようなデコルテのラインを露わにしてみた。

しょせん自分のような未成熟な小娘では、彼を誘惑することはできないのか。

劣等感が、香穂子を落ち込ませていた。

そっとバスルームの近くに行っても、彼は気付いている様子ではなかった。

シースルーのガラスはシャワーの湯気で曇り、彼がシャワーを浴びているシルエットが浮かぶ。

脱衣所のそばに立つと、またも動悸がしてきた。

シャワーの滴が落ちる水音に混じって、呻き声のようなものが聞こえた気がした。

気のせいかとも思ったが、耳を澄ませて聞いていると、かすかにだが吉羅の低い声が響く。

聞いているうちに、いつのまにか呻きは甘い喘ぎに変化した。

乱れてゆく、男の吐息。

中で彼が何をしているのか、未経験の香穂子でもすぐにわかった。

吉羅のそこは、明らかに男の欲望を正直に示していた。

彼の身体を見るような勇氣はとても持てなくて、素早く目を逸らしたつもりでいても、それがまともに視界に入ってしまったら、香穂子は胸の高鳴りを抑えることができなかった。

彼が自分に感じてくれているなら、嬉しい。

自分を抱くまいとして、中で自慰をして欲望を鎮めていたのだろうと思う。

女として自分を見てくれることを、どんなに強く願っていたことか……

彼女はひっそりと熱い溜息を漏らした。

「あ、あの……私っ、気分もよくなりましたし、それで、その、家に……」

「帰すと思ったのかね？」

ぼそりと低い声が、香穂子の頭上から降り注いだ。

聞き違いかと思うほど低い、威圧を含んだ強い声音だ。

「酔った男の言う事を信じるなんて……君は、つくづく甘いお嬢さんだね」

「いや……」

叫ぶ唇を強引に奪われる。

軽く合わせたと思うと、次には深く舌が差し入れられ、やがて香穂子の口腔内を吉羅の舌が塞ぐようにして舐めまわす。

ディープキスを浴びせられながら、香穂子はその初めての感覚に戸惑った。

粘膜同士が擦れあうと、そこからなんとも言えない快感が生じてくる。

唇だけではなく、口の中にまで性感があるだなんて。

恋人未満の間柄ではキスもされなくて、……これが初めてのキスになるのに。

いきなりディープの洗礼を受けて、香穂子は当惑しつつ快感を味わっていた。